



TITLE:

昨今多忙な彗星界

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. 昨今多忙な彗星界. 天界 1926, 6(61): 77-80

ISSUE DATE:

1926-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160495>

RIGHT:

昨今の多忙な彗星界

今までも度々本誌に書いた如く、昨1925年は彗星の出現が驚くべき頻繁で、吾々はコペンハーゲンから来る電報の應接に忙殺されるさいふ有様であつた。昨年中の出現彗星總計十二個、それは、順に列べるさ下の通りである

順	星名	発見者	発見日
1	シヤイン	{ G. シヤイン	3月22日
		{ J. コーマス	同 23
		{ ソラー	
2	リード	W. リード	3 24
3	オルキス	L. オルキス	4 3
4	テンベル第二	J. シトベ	6 11
5	ナルフ	J. シトベ	7 13
6	ボレリー	A. シヨマス	8 14
7	ブルクス	{ G. シヤイン	9 9
		{ V. アルビツキ	9 22
8	バラバシエフ	N. バラバシエフ	10 9
9	ブアーユ	W. バーデ	10 20
10	ザンビースブルク	{ G. ザンビー	11 17
		{ スブルク	
		{ W.H. ステヴァン	11 18
11	ベルテアー	{ L.C. ベルテアー	11 13
		{ キルク	11 18
		{ 田中靜人	12 3
12	エンソア	J. エンソア	12 14

此の中でシヤインと、リードと、オルキスと、バラバシエフと、ザンビースブルクと、ベルテアーとエンソアの七つの彗星は昨年初めて現はれた新彗星であつて、皆、拋物線の軌道を畫いてゐる。それ々々下記の日に近日點を通過して、また、永久に歸らぬ旅路へ、去つて行つて了うのである。

星名	近日點通過
シヤイン	1925年 9月 4日
リード	7 30
オルキス	4 1
バラバシエフ	(不明)
ザンビースブルク	9 29
ベルテアー	12 6
エンソア	1926 2 12

シヤイン、リード、オルキスの三彗星の発見事情は本誌第五十五號に可なり詳しく書いたから省く。其の後、オルキス彗星は可なり遠くへ行つて了つたが、シヤイン星は今尚ほ微光ではあるが海蛇座を西行してゐるし、又、リード星は水瓶座を北東に動いてゐる。

バラバシエフはロシアのウクラナイ州カル

コフ大學天文臺長であるが、此の人が十月九日にペガソス座の南部に発見した星は始め5.5等級と電報されて來たため、何れの天文臺でも大に期待して天を見たが、そんな大きな光りの彗星は一つも其の附近に見つからなかつたので失望した。ところが、後に電文は15等級の間違ひであつたことが解つた、15等の彗星では、100センチの望遠鏡でも觀測は容易で無い。此の星が其の後如何なつたか。報告が無いので一切不明である。

米國ヤーキース天文臺のザンビースブルク氏が十一月十七日に獵犬座に発見した彗星は、八等星で、可なり大きなものであるが、之れが氏が其の日の早朝「40時」の大望遠鏡でオルキス彗星を觀測しようとした捜索中、偶然そのフラインダー鏡に映じた新彗星であつたといふ。ところが此の星は翌日又英國カリニチにゐるステヴァンソン氏にも発見された。最近報によると、此のザンビースブルク星の軌道は

$$\left. \begin{array}{l} \text{近日點通過 } T=1925\text{年}9\text{月}29.37\text{日} \\ \text{近日點引數 } \omega=99^\circ 10.73' \\ \text{昇交點黃經 } \Omega=334^\circ 46.45' \\ \text{軌道面傾斜 } i=46^\circ 57.15' \end{array} \right\} (1925.0)$$

近日點距離 $q=1.445$ 單位

であつて、尙今暫くの間は獅子星座に見える筈である。——因みに、ザンビースブルク氏の発見した彗星は之れが第二番目である。第一番は一昨1924年7月31日にエンケ彗星の第36回の再歸を発見した。

本誌第五十九號第484頁に書いたやうに、去る十一月二十二日、吾人はブルク氏が一新彗星を発見したとの電報を受けた。此の星は運動が速くて、毎日六七度づゝも東南へ動くものだから人は皆驚いた。ところが近頃得た報知によると、此の星は米國でオハ州のアルフォスに居るベルテアーといふアマチュア天文家が十一月十三日の夜にヘルクレス星座の西北端に発見したものである。ベルテアー氏の発見が米國の各天文臺に報ぜられて、ヤーキースやリクあたりの諸所の天文臺では觀測者たちが、電報で知らされた天のあたりを捜したけれど、見付らなかつたので、如何したところか迷ふたといふ話であるが、それは無理も無い話である。十一月の中頃此の星は毎日八九度づゝも速く動いてゐたのだから

ら、全く之れは未曾有の速度であつて、誰も此んな速い星さは豫期せず、従つてベルチャー氏が発見したさいふあたりを捜してゐたのである。しかし発見者ベルチャー氏は流石に之れを見失はなかつたから十八日頃から諸所の天文臺でも之れを捕へることが出来た。——こゝに又面白いことは、此の彗星が我國でも発見されたことである。十二月六日に吾人は長野縣の田中靜人氏から下の如き電報を受け取つた。

スイセイセキケイ一九三五セイイミナミ
五ド ミナミヘイチド 彗星ミヤカダナカ
シズ ト

次いで又其の翌日にも 同氏から訂正電報が來、同時に手紙も落手した。之によつて電報の真相が解つたのであつた。全く之はベンチアール・グルク兩氏が発見した彗星を、全く、其れさは知らずに新しく発見したのである。可なり遅かつたには違ひないが、さにかく之は正しく発見に相違ないとして見れば、之日本人の第六番目の彗星発見である。即ち此の序でに、日本人の発見した彗星の記録を書けば

順	発見者	彗星	発見日
(1)	佐々木哲夫	フインレイ	1919年10月19日
(2)	佐々木哲夫	メトカーフ	同 10月25日
(3)	百濟 敬猷	テムベル	1920年 5月25日
(4)	中村 要	ペライン	1922年11月30日
(5)	百濟 敬猷	テムベル	1925年 6月
(6)	田中 靜人	ベルチャー	1925年12月 3日

此の中で(1)の事は本誌第一卷第九號に精しく出てゐる。又(2)の事は、逸話ではあるが、本誌第一卷第 154 頁に自分が書いた。(3)は未だ本會創立以前の事であるが、やはり、本誌第一卷第11頁に關係記事がある。(4)は本誌第3卷第 24 頁にある。遺憾にも此の星は中村氏以外に誰も見なかつたので、果して之れが豫想通りのペライン星であるか如何か、今尙確定的では無いが、近刊クロムメルンの彗星目錄(本誌第五卷第332頁を見よ)中にも第 546 番星として載せられてある。(5)は今世の中に全く知られてゐない事實であつて、自分が今年の夏、百濟氏に會つた時、氏が直接話されたことであるが、氏一流の謙遜から「之れは決して公表して呉れるな」と言はれたから、自分も沈黙してゐた。しかし此うした記録を作つて見るさ、知つてゐながら此の事實を見逃がすわけには行かないので、百濟氏には、破約して済まないわけではあるが、學界のためと思つて許して頂きたい。——

百濟氏は去る 1920 年の時にも自己が計算した位置に此のテムベル星が來てゐるか如何かを試みるために京都大學の十八センチを使用して遂に発見に成功されたのであるが、昨年度にも亦、此の星が再歸する頃であることを思ひ、六月の始め、ほゞ其の位置を算出して、結果を確めるため、目下大阪に歸省中、其の所持の 10 センチ望遠鏡で確かに此のテムベル星を発見されたのであつて、其の日は、聞いた自分の記憶に明らかなではないが、多分六月八九日頃か? さにかくシンドベ氏が発見するよりも数日だけ早かつた。だから、普通の場合ならば、此の発見は直ちにコペンハーゲンに知らされて、初発見の名譽が百濟氏に降りかゝつて來た筈である。——かうして、百濟氏とテムベル彗星とは重ね々々の因縁が付いてゐるのであるから、百濟氏は今後此の星を自己の子の如くに思つて、出現の度毎に永く面倒を見てやつて頂きたいものである。

さて又ベルチャー・キルク・P 中彗星の話に歸るとして、此の彗星の軌道要素は、クロムメルン氏によれば

$$\begin{aligned} T &= 1925 \text{年} 12 \text{月} 6.936 \text{日 (U.T.)} \\ \omega &= 117^\circ 56' \\ \Omega &= 131 \quad 47 \\ i &= 144 \quad 59 \end{aligned} \quad \left. \vphantom{\begin{aligned} T \\ \omega \\ \Omega \\ i \end{aligned}} \right\} (1625.0)$$

$$q = 0.7660 \quad (\text{A.U.})$$

次ぎに、エンソア彗星は昨年十二月十四日南アフリカの英領トランスヴァール國プレトリア公衆病院のエンソア氏が南天のレチクル星座に発見したもので、取り敢へず之はジョハネスバークのユニオン天文臺に知らされ、其所で引き続き觀測が行はれてゐたものである。始めのうち、星の位置が餘りに南へ偏してゐたので各國へはコペンハーゲン電報が來ながつたが、英國あたりでは普通の新聞電報として十二月十六日にはロンドン・タイムス紙に載せられた。光りは可なり大きく、発見當時は約八等級であつて、長さ15'の尾があつたことであるが、此の星は其の後漸次北上すると共に地球にも近づき、光りも大きくなりつゝあるので、二月頃にはほゞ便利に觀測が出来るだらう。ウド氏が計算した軌道要素は

$$\begin{aligned} T &= 1626 \text{年} 2 \text{月} 12.41 \text{日 (U.T.)} \\ \omega &= 358^\circ 44' \\ \Omega &= 282 \quad 17 \\ i &= 122 \quad 52 \end{aligned} \quad \left. \vphantom{\begin{aligned} T \\ \omega \\ \Omega \\ i \end{aligned}} \right\} (1925.0)$$

$q=0.3350$ (A.U.)

であるが、之れは勿論暫定的のものであつて決して深く信頼されるものではない。

昨年出現したテムベル、ナルフ、ボレリー、ブルツクス、フアーユの五星は皆木星族の週期彗星であつて、1925年中に近日點に歸來することば、かれてから知られてゐたのである。各星の週期と、又、今年の出現によつて確かめられた近日點通過期とを列記すると、

星 名	週期	近日點通過
テムベル第二	5.16 年	1925年 8月 7日
ナルフ	8.28	同 11月 7日
ボレリー	6.885	同 10月 7日
ブルツクス	6.94	同 11月 2日
フアーユ	7.31	同 8月 7日

テムベル彗星は、多くの週期彗星中、エンケ星に次いで週期の短かいものであつて、1873年7月3日に伊國ミラノ天文臺のテムベルが発見したのが最初の出現であつた。其の後、1878年、1894年、1899年、1904年、1915年、1920年に出現が発見された。1920年には百濟民が発見したのは上記の通り。氏が其の年の発見觀測から修正した軌道要素が基となつて、昨年の第八回出現にはシトベ氏も発見に成功したのであつた。次ぎは1830年10月に近日點へ歸來する筈である。

ナルフ彗星は1884年以來の有名な星であること短かく本誌第五卷第291頁にも記した所である。此の星は不思議な因縁により、今はポーランドのワルソウ天文臺長であるカメンスキ氏が熱心に軌道研究を續けてゐる星である。氏の研究によれば、此の星は1922年9月には木星に甚だしく接近したため、軌道の形が大に變化し、週期は6.8年から8.3年となり、近日點距離も1.60單位から2.40單位に増した。其のため、昨年度の出現は其の豫報位置が可なり怪ぶまれたものである。カメンスキ氏は數理上此の星が1925年11月7日午後五時(グリニチ時)に近日點を通過すると豫告したが、實測の結果は之れが11月7日午後九時半であつて、豫告とは僅か四時間の違ひに過ぎなかつた。若し此のカメンスキ氏の研究が無かつたならば、此れ程軌道の變化してつた彗星は遂に見出すことが不可能で、永久に見失はれたかも知れない。

ボレリー彗星は初め1904年に佛國マーセイユで発見されたものであるが、其の後、1911年と1918年とに近日點に歸來して発見され

た。1925年には10月中旬に近日點へ歸來するだらうと豫想されてゐたが、實際シヨマス氏が発見した位置から推算すると近日點は10月7日に通過した筈である。次ぎの近日點通過は1932年八月頃である。

ブルクス彗星は、今までの歴史を簡単に本誌第五卷第431頁に書いた。シメイ天文臺のシャイン氏が九月九日に寫眞で発見し、次いで又キエフ大學のアルビツキ氏が其れと知らずに新しく発見して、後之れがシャイン氏の発見と同一星であることが解つたものであつた。ドウビアーゴ氏の研究によれば1925年度の近日點通過は11月8日の筈であつたが、實際、シャイン氏等が二十二年ぶりの此の星を発見觀測した位置から推算すると、此れは11月2日午後三時(グリニチ時)に近日點を通過したことゝなつてゐる。

フアーユ彗星のことは、本誌第五卷第438頁に書いた。昨年度は第十回の出現であるが、1918年度にはフアー・フォンタナ氏の豫報が誤まつてゐたため、遂に誰にも発見されなかつた歴史がある。昨年度はストロエムグレン氏の軌道要素によりクリップスが近日點通過を11月6日午後四時(グリニチ時)と算出したが、パーデ氏が實際觀測した結果からは其れが11月7日午後一時であつて、其の差は一日を出でない好成绩である。

尚、今1926年中に近日點へ歸來する彗星は下の六個である。

順序	星 名	近日點通過期	見込み
1	コブ	1926年 1月末	不良
2	テムベル・スキフト	同 3月末	不良
3	フィンレイ	同 6月末	良
4	ホームズ	同 10月頃	良
5	ジャコビニ・チンナー	同 12月初	良
6	タトル	同 5月初	良

コブ彗星は今までには1906年と1919年とに出現されたものであるが、1913年には近日點通過時期が地球と遠距離にあつたから発見されなかつた如く、今年も亦可なり困難な順番にまはり合はせてゐる。

テムベル・スキフト彗星は、又、テムベル第三週期彗星とも呼ばれる。1869年にテムベルが之れを発見し、1880年にスキフトが新しく又発見した星であつて、其の後、1891年と1908年とには発見された。今年は三月末に近日點を通過する筈であるが、前記コブ星と同様、地球に遠いので、見付からないだらう。

フィンレイ彗星は 1919 年即ち第四回目の出現の時、京都の佐々木君が偶然山羊座に発見した星である。詳しくは本誌第一巻第九號を見られよ。此の星は 1886 年に南アフリカのケープ天文臺でフィンレイが発見したのが最初で、其の後、1893年、1906年に出現した。今年が第5回出現の筈であるが、近日點は 6 月末に通過するだらうが、觀測は年末になる程好い。発見も十月頃になつて行はれるであらう。

ホームズ彗星は軌道が圓に最も近い彗星として有名であるが、(本誌第一巻第104頁を見られよ) 今までには 1892 年と、1899 年と 1906 年とに発見され、1913 年と 1919 年とには発見されなかつた。だから丁度二十年間消息の無い星である。今年の出現期に於ける地球との距離は非常に良いとは言へないが、それでも今までの中では最も有望である。夏七八月頃には大望遠鏡で誰かが発見するであらう。

ジャコビ彗星は 1900 年の末に初発見された星であるが、1907 年には発見されず、1913 年には発見され、1920 年には発見されなかつた。週期は約六年半だから交互に発見される年と発見されない年とが来るのは止むを得ない。今 1926 年は発見される番の年である。多分 10 月か 11 月頃であらう。

最後に、タトル彗星は珍らしく土星族の彗星であつて、週期が十三年半である。今までには、1790年、1858年、1871年、1885年、1899年、1912年に発見された。1858年以後は近日點通過毎に必ず発見されてゐるから、今年もまづ有望と見て好からう。但し近日點通過は五月始めであるが、五月になつて了へば地球と可なり遠く離れることになるから、発見はむしろ年の始めが好い。此の文を書いてゐる時、ちょうど英國から落手した報告によると、昨年十二月の中頃、コペンハーゲン電報が歐洲の一部には飛んで、同月十五日ベルジク國ユクル天文臺のデルボールト氏が

赤經 20^h 56^m 赤緯 $+30^{\circ}19'$

の白鳥座の中に入等級の星雲狀天體を発見したと報ぜられ、これはタトル彗星かも知れないと一時疑はれたといふ。なるほど此の位置はタトル星の現はれる位置に近いに相違ないが、其の後、もう少し確定的の電報が來ない點から見ると、間違ひであつたかも知れない。若し之れが本當とすると、1925年度には總計十三箇の彗星が発見されたこととなるが。

尙此の外に週期的でない新彗星が多く発見されるであらう。(山本)

本誌第61號第37—40頁所載

長週期變光星の目録正誤表

	誤	正
004435	赤緯 $+33^{\circ}$	$+35^{\circ}$
021143	符號 021143	021143a
021403	名稱 0 (オミクロン)	
023156	光度 9.6	7.6
044340	名稱 うた	ぐわか
053068	分光形 Rp	R8
054920	符號 054920	054920a
065208	赤緯 35^m	53^m
070122	符號 070122	070122a
081633	名稱 らしんばん	やまれこ
083405	赤緯 4°	-06°
085120	名稱 Cnc	Cnc
090425	ク	ク

	誤	正
141567	赤緯 62^s	42^s
154615	分光型 Nb	Md
154639	〃 Md	Nb
155823	赤緯 60^m	00^m
162112	分光型 Mb	Nb
164844	赤緯 $58^{\circ}8'$	$53^{\circ}8'$
175453	名稱 Pra	Dra
181136	赤緯 86°	36°
192745	赤緯 68°	58°
205923	赤緯 $20^h 01^m$	$21^h 01^m$
212030	名稱 M(Mic)	S(Mic)
230110	赤緯 $22^h 02^m$	$23^h 02^m$

三澤氏の太陽黒點觀測報告正誤表

1925年5月分(天界第58號所載)訂正

日	黒點群	黒點數	大黒點數	白斑	備考
30	2	4+1=5	0+1=1	1	2新黒點群1、西方南ノ高緯度ニ1、東方北ノ高緯度ニ発見白紋ノ東方單獨
31	3	4+1+1=6	0+1+0=1	1	1小黒點白紋ニ 圖マレ東端近ク北ノ高緯度ニ発見